
ボーイギャザーガール

谷之雄二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーイギャザーガール

【Nコード】

N8397S

【作者名】

谷之雄二

【あらすじ】

僕と彼女は不器用なカップルで……。一組の男女を書いた掌編物。

「ねえ、聞いてる？」

不機嫌そうな女の声が聞こえて、山内正吾やまうちちよじゅうはハツとなった。正確には、ぼーっとしていた意識が声によって引き戻されてきたのである。

「う、うん、聞いてる」

だから、正吾はあわててそう言いつくろった。

数歩先の距離に行く女　正吾の彼女である西宮美香にしのみやみかは、明らかにそれを信じていなかった。じと……と目を細くする。

「ほんとかなー？」

「ほ、ほんとだよ」

「じゃあ、私が何を言ったか、言ってみせてよ」

「え？ えーっと……」

当然、覚えているはずもなかった。正吾はしばらくうんうんと唸っていた。が、美香の顔と宙とを視線でさまよううちに、やがて、彼は頭を垂れた。

「……すみませんでした」

「最初っからそう言えばいいのに」

呆れ返る美香は嘆息して、そして言った。

「明後日、一緒に遊園地に行こうよって……そう言ったのよ」

「それって……」

わずかに顔を紅潮させて齒切れ悪そうに言う美香から視線を外して、宙を見上げながら正吾はなにやら考える仕草をした。どうやら自分の中の思考回路を巡っているようだ。とりあえず、思いつく限りの知識を総動員し、結果的にはやっぱり最初に思い至ったものしか考えられなかった。

「……デート？」

「だああああ、そんなストレートに言うなあ」

楽しそうにはしゃぐ美香に対して、正吾のそれは普段の彼からは想像できないほどのわめき方だった。ビュンビュンと過ぎ去る風の音が邪魔であるため、聞こえるようにとにかく大きな声で美香は言った。

「あはははははっ！ 楽しいわねー、正吾ー！」

「ぜんぜんたのしくないいいいいいい！」

二人はいま、ジェットコースター真っ最中だった。

ジェットコースターを終えて、正吾はベンチに座っていた。いや、座っているというよりかはかるうじて身を預けているというところか。ぐでんと憔悴しきった様子で、首を倒して空を見上げ……ああ、動かない青空つて素敵だな、とか思っている最中なのであった。

「なーにくたびれてんのー。ほい」

そんな彼のところに缶ジュースを両手に一本ずつ持った美香が戻ってきた。彼女は冷たい缶ジュースを正吾の視界を覆うようにしてチラつかせてやる。

「オレンジとグレープ、どっちがいい？」

「ん……オ、オレンジ……かな」

ようやく首を持ち上げて、正吾はオレンジジュースを受け取った。遊園地、である。視界に広がるのはたくさんのアミューズメント。たとえば人を乗せて振り子の要領で揺れる模造の帆船であったり、しっかりと乗客を固定すると一気に高度何百メートルなんていう高さまでたつた数秒で昇ったりする昇降機であったり、ファンタジーに出てきそうな馬に乗って音楽に合わせて円形状に回ったり……大体オーソドックスなところだ。

それでもこの市内ではかなり大きな遊園地であるし、子供も楽しめて大人も楽しめるところから、かなり賑わっていると言えた。特にこの遊園地の目玉であるドラゴンツイスターという名のジェットコースターは、その手のマニアからも支持を受ける出来栄らしい。

「ジェットコースターひとつで根を上げるなんて、男らしくないわねえ」

「あれは絶叫系が苦手な僕じゃなくても、根を上げそうなものだけどね」

正面にあるその例のドラゴンツイスターから出てくる人は、とにかく笑顔でご満足な様子の絶叫系マニアか、あるいはぐったりとしてここはいま本当に地上なのか……とか思っている人の二つに二分される。

当然、正吾は後者だった。というか、ほとんどは後者なのであるが。

「うーん、そろそろ乗りつくしてきちゃったわね」

「そうだね。あと乗ってないのは……アレぐらいかな」

そう言っただけで正吾が指をさしたのは、遊園地といえばアレがあると言っただけでいいぐらいのアミューズメントの大目玉だった。たとえば遊園地の存在を知らなかったとしても、アレさえ見ればそこに遊園地がある、ということはずくに判断できるぐらいの代物だ。

まるで来場者たちを見守るかのような遊園地の中央にあるそれは、穏やかに、そしてゆっくりと回転していた。

ゴンドラに乗ると、一度だけ足元が揺れたような気がした。絶叫系にも通ずるそれに少しだけ怯えが顔を出したが、すぐに引っ込むと、それは静寂と遠い声の狭間に消えてしまった。

「あ、見て……動いてる」

対面に座る美香はそう言っただけで、身を乗り出すように外を眺めた。それにつられて正吾も外を見やる。徐々に高くなっていく視界が、少しずつ遊園地の様子を小さくして……やがてそれ以外の外の景色も見せてくれた。

そんな景色を目の当たりにしながら、二人は今日のデートのことを振り返るような話をした。たとえばそれは、絶叫系に乗るたびに設計者の期待通りの絶叫をあげていた正吾のことであるとか、ある

いはお昼に食べた彼の作ったお弁当であるとかだ。

そんな何の変哲もない会話のうちに、観覧車は真上に達しようとしていた。景色は広大なものとなって、まるで丘の上から見下ろした壮大な景色のようなものが広がっていた。何より、向こう側に伸びる永遠のような海の景色が、二人の胸を高揚させてくれた。

気づけば、感嘆の声をあげて二人は無言になっていた。いつもは正吾を引っ張るようにしてはしゃぎまくる美香も、なぜかこのときは静かに海を見下ろしていた。

ふと、正吾の頭の中に過ぎることがあった。それは、彼女が自分に告白してきてくれたときのことだった。それまでただのクラスメイトであった存在が、一気に気になる存在になった瞬間だ。物事に積極的ではなく、静かにクラスの空気に溶け込んでいただけの自分を、どうしていつも元気でみんなのムードメーカーのような彼女が好きになったのか。

時々、自分はきつと彼女につりあわない存在で、もつと彼女にふさわしい存在が彼女の彼氏になるはずだったけど……悪戯な神様がどこかで運命をいじくってしまったのだ。そんなことを考える。

だけど……僕は彼女が好きで、彼女は僕が好きだと言った。今はそれだけが、確かであればそれでいいと、正吾は思った。

やがて、ゴンドラが真上から過ぎた頃。

「ねえ、正吾」

「……ん？」

美香が正吾を呼ぶと、彼は景色から彼女へと視線を移した。美香はいまだ外を眺めていた。言葉を促すようなことはしなかった。だが、彼女は正吾に向き直ると、笑顔で言った。

「幸せだね」

その笑顔は、少しだけいつもと違う気がした。二人ではじめて乗った観覧車。はじめて上空から二人で見た景色は美しく……羨ましかった。

「うん、幸せ」

そう言って、正吾は美香のように笑ってみせた。

(後書き)

ボーイミーツガール………ミーツ………出会う。トウギャザー、
—
緒、集まる？ ギャザー………ボーイギャザーガール！
こんな感じで書きました。楽しんでいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8397s/>

ボーイギャザーガール

2011年4月29日20時55分発行